

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	釋迦院その他 : 歌
Author(s)	菅野, 寅夫
Citation	龍南, 2 3 5 : 1 7 - 2 4
Issue date	1936-11-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7346
Right	

釋迦院その他

菅野寅夫

七月釋迦院に登る

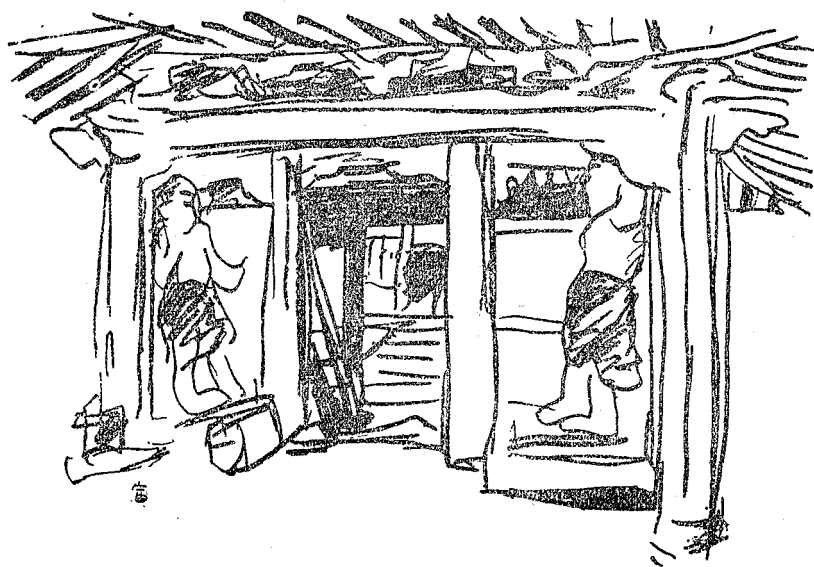
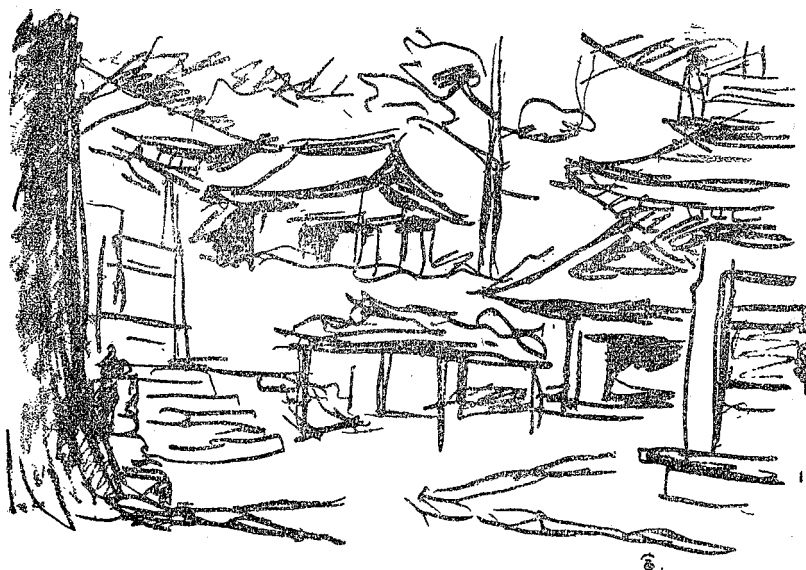
谷川にひとと枝の伸びいでし合歡は花咲きゐたりけるかも

中空は霽れて青きにみんなみの山のいただきを雲過ぐるみゆ

峠路に近づく頃に谷川の音は左にかはりゐにけり

杉むらの木末^{こねれ}ゆひびく鯛の聲すむ山は遽^{ふた}まりにけり

三つまたの峠路に來て樂しけれ晝餉を開く杉の木蔭に



山あひに二つ並びし家ありて紅きダリヤを植ゑてゐたりき

霧うすき大行寺山釋迦院の御堂の縁に茶を喫みにけり

この寺に七つあるとふ不可思議を語る童の口は慣れるず

釋迦院に詣で來ければ山門の金剛力士丹は褪せてをり

敕願を畏みにつつ山邃く寺を建てにし遠世思ほゆ

うすくこむる霧はれゆかばいただきより有明の海が西に見ゆとふ

山腹を下りゆくところに霧はれて左にとほく白き海見ゆ

赤土道のこごしき坂を下りきりていでし川邊に河鹿は鳴くも

上島^{かみ}を過ぎたる頃に金峯の形は西に見えはじめたり

八月ふるさとに歸りて

しらじらと晝の雨降る田の上に鵲低く下りにけるかも

枝にゐて二羽遊びぬし鵲の白き翅伸ばし飛び立ちにけり

夕蛙^{かわづ}やうやくしげく啼くころに母と二人寝る蚊帳^{かや}をつるなり

母と寝てかたるしたしき夜すがらを蛙の聲は低く絶えせず

夜すがらを絶えぬ蛙の聲さへもふるさとなればかなしきものを

翅白き鵲多き畑あひのこの徑^{みち}を行けば祖母の寺に近し

おほ母の寺に詣でて一つ一つ五百羅漢を眺めけるかも

亡き父が山ゆ曳き來て植ゑし松の枯れゆくを母は歎かひたまふ

田代にて

孟宗の藪にここだく茗荷の子生えゐる家に二夜宿りぬ

八月雜詠

警戒を要するとききし荒れ外れて月夜明りに吹く風もなし

部屋の灯のとどきて明き芝生にはくつわ虫なく聲も聞えず

あさ毎に敷へりて行く朝顔のあざらけき朱を見つつ惜しむも

やうやくに敷へりゆきて裏庭の花朝顔は咲き盡きんとす

百日紅^{さるすべり}塀より伸びて紅に咲きゐる路地を暑き日に行く

一人居も十日を経れば汗ばみし禪^{ぜん}を洗ふことも慣れぬる

丘に來て夕みければ空低く雲が崩れて消えゆきにけり

眞晝間の暑さはいまだ衰へね宵は虫なく頃となりぬる

正午^{ひる}近く通り雨ふる日和癖いまだも止まず夏ゆかんとす

虫がなく夜頃となりぬ宵過ぎの梟^{きう}の聲は聞かずひさしき

ながかりし休も末に近づきて漸く人に會ふこと多し

雨やまぬこの夜半過ぎを草の葉に虫はひそみて鳴きゐるならむ

鶏小屋の前にしやがみて鶏に青菜食はすを子等は樂しむ

さよ更けてここに聞ゆる汽車の音晝の間に聞きしことなし

あさけより空に風なきうす曇り池に金魚が赤く動かず

電車下りて渡る子飼の橋の下に泳ぐ子供は少くなりぬ

芝草に藤棚ふじたなのかげ濃く落ちていまかも月は中空にあらむ

九月 雜 詠

虫の音は更けて冴えゆけこの夜半も薔薇の垣根の盡くるあたりに

あけ近き夜空はろかに遠雷のただちに消ゆる光ながれぬ

稱妻の音なく光る明け近く五位驚わたる聲ききにけり

蟬の聲重くきこゆる日盛りに疲れてわれはしまし眠りぬ

捕へ來て子らが飼ひゐるこほろぎは机の下の暗がりに鳴く

水ぎはに徑は盡きて曼珠沙華朱く花咲きたりけるかも

曼珠沙華捨てあるみれば子どもらが莖折り遊ぶことはすたれず